



大分県における水産業の展開

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2014-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 周作 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4818

大分県における水産業の展開

中村 周作

The Development of Fisheries in Oita Prefecture

Shusaku NAKAMURA

1. はじめに

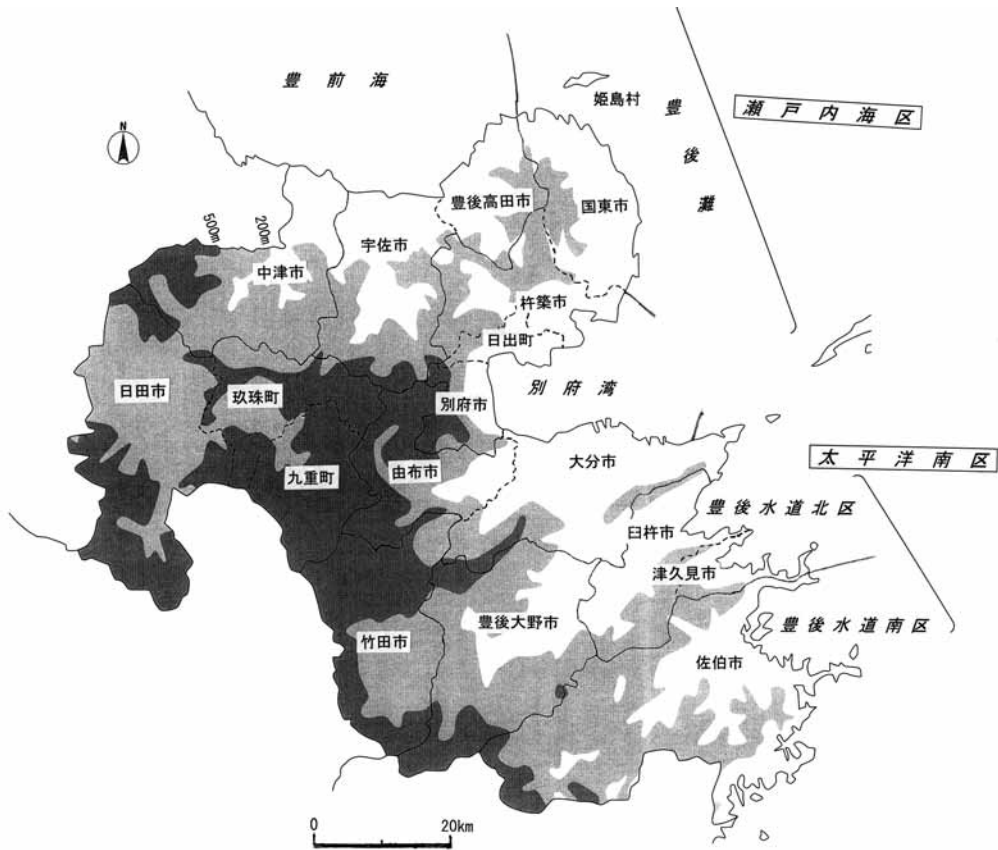
本稿の目的は、大分県各地に展開する伝統的魚介類食を食材供給という面で育み、下支えしてきた当県の水産業の特徴とその地域的展開について明らかにすることである。なお、ここで言う水産業とは、用語的には類似の漁業と同義ではなく、販売を目的に天然魚介を採捕する業である漁業に加えて水産養殖業や水産製造業を含む概念である（柿本，1987）。

以下、本稿では、①大分県の水産業に関わる水域を中心とする地域の概観、②生産の推移を中心にした当県水産業の特徴、③個々の海区や漁業拠点たる漁港の特徴について、解説を加えていく。

2. 地域の概観

大分県は、変化に富んだ海岸線を有し、その総延長は772 kmに及ぶ。海区としては、瀬戸内海区と太平洋南区に大別され、前者中に①豊前海、②豊後灘、③別府湾、後者中に④豊後水道北部、⑤豊後水道南部の5海域が含まれている。

第1図概観図に示した豊前海は、3,100 haに及ぶ広大な干潟と沖合に広がる平坦な浅海域からなる。それに続く国東半島沿岸に広がる豊後灘は、豊後水道からの魚類の回遊路に当たる。また、深く入り込んだ遠浅の別府湾は、外洋水と内海水が混合する栄養豊かで生産性の高い海域となっている。豊後水道両海域は、複雑なノコギリ歯状の凹凸が続くリアス式海岸を成す日豊海岸の前面に展開し、天然礁にも恵まれた好漁場、かつ養殖適地を成している（大分県農林水産部，2012）。そのそれぞれが個性豊かな海域である。沿岸では、そういった海域の特徴を生かした沿岸漁業や養殖業、さらに遠洋漁業に至るまで、地域住民の努力の賜である様々な漁獲活動が展開してきた（米田他，1981）



第1図 地域の概観

3. 大分県の水産業

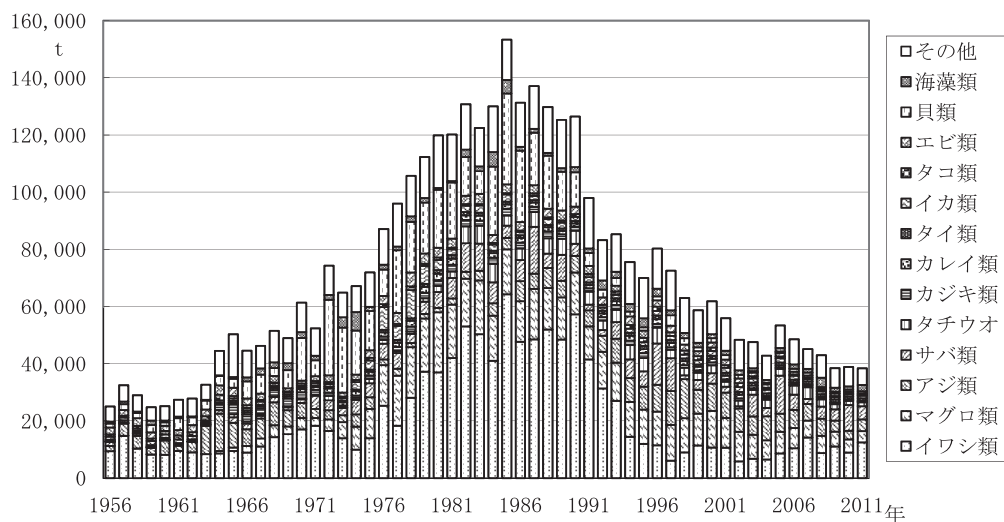
2011（平成23）年度の漁業・養殖業に関する都道府県別統計を見ると¹⁾、海面漁業漁獲量において大分県は、全47都道府県中の23位（全国比の1.0%）であり、九州の中では、長崎県（都道府県別2位，全体比7.1%），宮崎県（同10位，2.7%），鹿児島県（同12位，2.6%），福岡県（同21位，1.4%）に続く5位となっている。

海面養殖業は、収穫量において全都道府県中の12位（全国比の3.2%），九州では佐賀県（都道府県別3位，全体比8.4%），熊本県（同5位，6.3%），鹿児島県（同7位，5.8%），福岡県（同8位，5.4%）に続いて、やはり5位となっている。

内水面漁業漁獲量は、統計上の判明分で全都道府県中の14位（全国比の1.1%），九州では福岡県（都道府県別8位，1.7%）に次ぐ2位と健闘している。

内水面養殖業は、これも統計上の判明分で全都道府県中の16位（全国比の1.0%），九州では鹿児島県（都道府県別1位，全国比22.3%），宮崎県（同3位，12.9%），熊本県（同14位，1.6%）に次ぐ4位となっている。

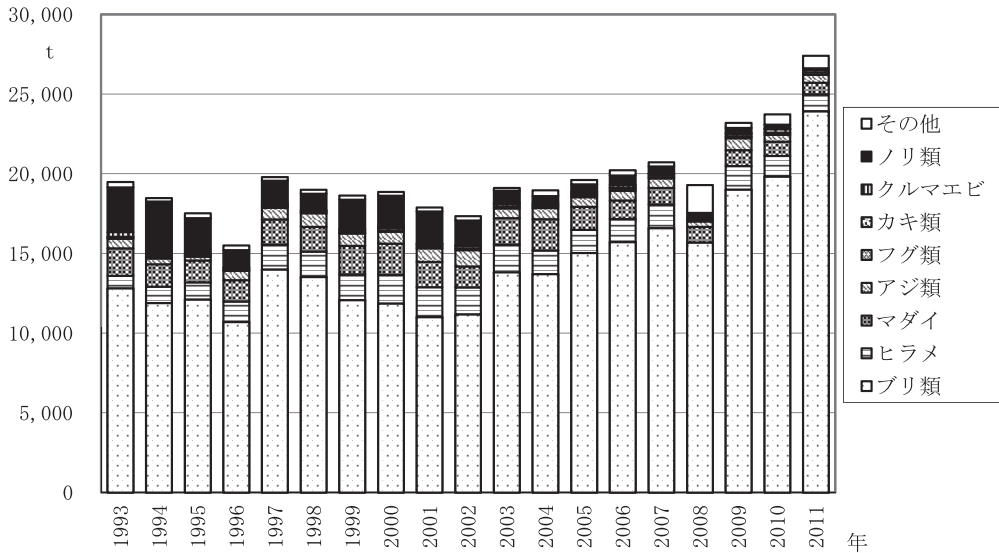
大分県の海面漁業・養殖業について、生産統計を見ながら、さらに分析を進めてみよう。第2図は、過去55年間における主要魚種別海面漁業生産量の推移を示している。これを見ると、かつては、漁業技術の発達に伴って生産量が伸び、1985（昭和60）年に153,322トンという総量上のピークを迎える。しかしその後生産は急減し、2011（平成23）年には、38,357トン、ピークからの減少率が75.0%の大幅減となり、量的には1963（昭和38）年段階にまで逆戻りしてしまった。漁獲減の最大要因が、全年を通じて最大漁獲魚種となっているイワシ類の減産にあることは図からも明白であり、85年からの減少率が80.5%にも達している。これに次いでいたのが貝類であったが、これも同年からの減少率が何と97.7%と、ほとんど採れなくなったことがわかる。この他、主要魚種であったマグロ類も同減少率が75.7%となっている。そういった減産傾向の中で、生産量的にはそれほど大きなものではないが、タチウオが2011年現在で都道府県別生産の2位（1位愛媛県）、クルマエビが同3位（1位愛媛県、2位愛知県）、海藻類が同5位（1位北海道、2位愛知県、3位青森県、4位三重県）と健闘している。



第2図 大分県魚種別漁獲量の推移

農林水産省：「漁業・養殖業生産統計」他による。

第3図は、過去19年間の主要魚種別海面養殖業収穫量の推移を示している。これを見ると、総量的には漸増傾向が顕著で、1993（平成5）年の19,488トンから2011（平成23）年の27,403トンへと大きく増産している（増加率40.6%）。内訳を見ると、日豊海岸の県南部内湾が主要生産地となっているブリ類が一貫して最大の生産をあげ、近年の増産も顕著であり（1993年からの増加率46.4%）、都道府県別にみても全国3位（1位鹿児島県、2位愛媛県）となっている。なお、ブリ類養殖に関しては、経営体数は減っているものの1経営体当たりの生産量の増加、すなわち規模拡大が総量を押し上げているが、経営者の高齢化もあって今後の生産は予断を許さない状況にある。また、量的には少ないもののヒラメの生産が都道府県別にみても1位である。一方、主要生産物の一つであった豊前海（主に中津地区）でのノリ類生産は、2002（平成14）年まで毎年1,500トンを超える生産があったものが、翌年半減してその後、今日に至るまで一貫



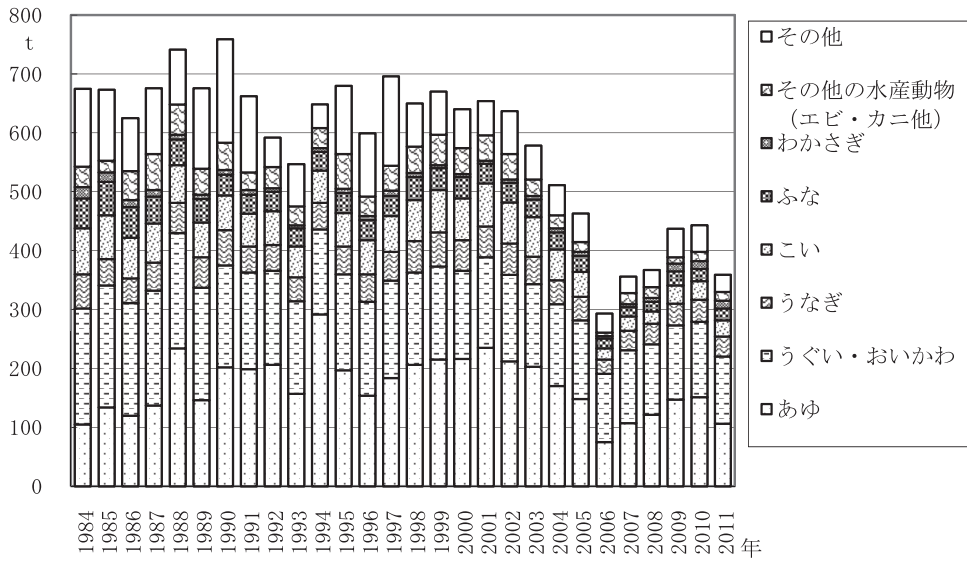
第3図 海面養殖業魚種別生産の推移

農林水産省：「漁業・養殖業生産統計」他による。

して減少している。この減産の原因は、主に「赤腐れ病²⁾」の蔓延によるものであった。しかし、減産は一時的な傾向に止まらず、翌年以降も減産が継続している。大分県の豊前海域は、もともと栄養塩類の少なく良質のノリ生産がむずかしい海域であり、経営者の高齢化に伴っての廃業が進んだこと、高価なノリ製造機が耐用年数を過ぎて更新時期を迎えたのを契機に、買い換えをせずに廃業を選択する業者が多かったことなどが減産の主な理由であるが、近年の温暖化の影響とされるものの原因が未だ不明のバリカン症様の病気³⁾が、さらに減産に拍車をかけている。ちなみに、ノリ養殖は、現在でも中津市沿岸に生産中心があり、干潟での支柱式養殖が行われる。温暖化に伴ってノリの種付け時期が従来の10月1日から同月上～中旬に引き下げられた。終了時期は、海域の栄養塩類が急減する2月半ば～3月と変わっていないため漁期自体が短縮されたことも減産の一因となっている⁴⁾。

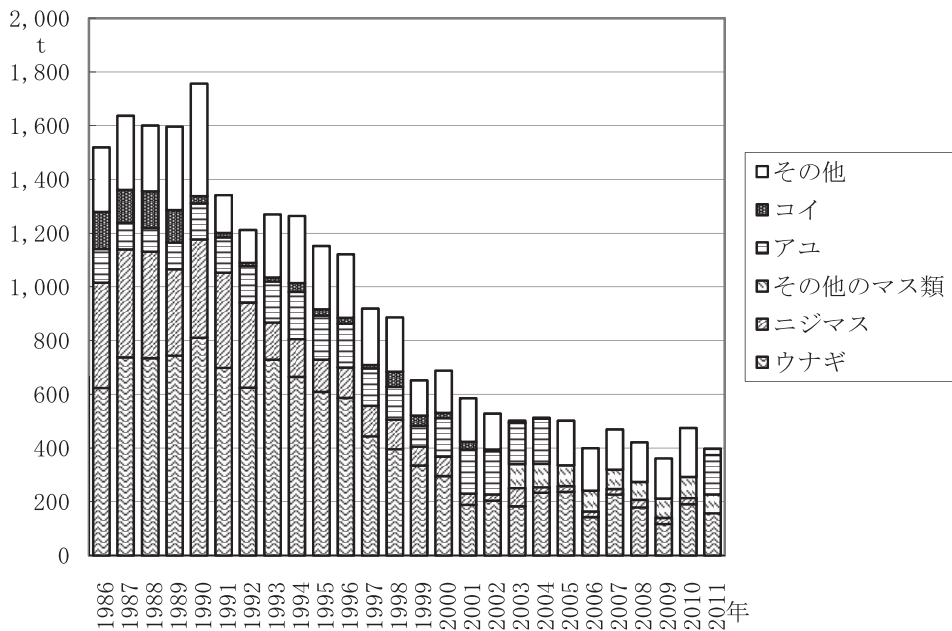
第4図は、過去28年間の主要魚種別内水面漁業生産の推移を示している。図を見ると、総量としては横ばい傾向にあったものが、1997(平成9)年以降減産に転じている。図中でピークであった1990(平成2)年と2011(平成23)年の数値を比べると、減少率が52.7%となっている。主要魚種であるアユ、ウグイ、オイカワなどいずれも減産傾向が著しい。

第5図は、過去26年間にわたる主要魚種別内水面養殖業生産の推移を示している。これを見ると、総量的には減産が著しいことがわかる。図中で生産のピークであった1990(平成2)年と2011(平成23)年の数値を比べると、減少率が77.4%となっている。主要魚種であるウナギも、同期間で減少率が80.6%に達している。統計上、その他の魚種も同様に減産しており、統計上の数値が記載されなくなったものもみられる。ただ、統計には出てこないものの中に例えばドジョウがあるが、これは県水産試験場の努力もあって、2011(平成23)年には生産量10.5



第4図 内水面漁業魚種別生産推移

農林水産省：「漁業・養殖業生産統計」他による。



第5図 内水面養殖業魚種別生産推移

農林水産省：「漁業・養殖業生産統計」他による。

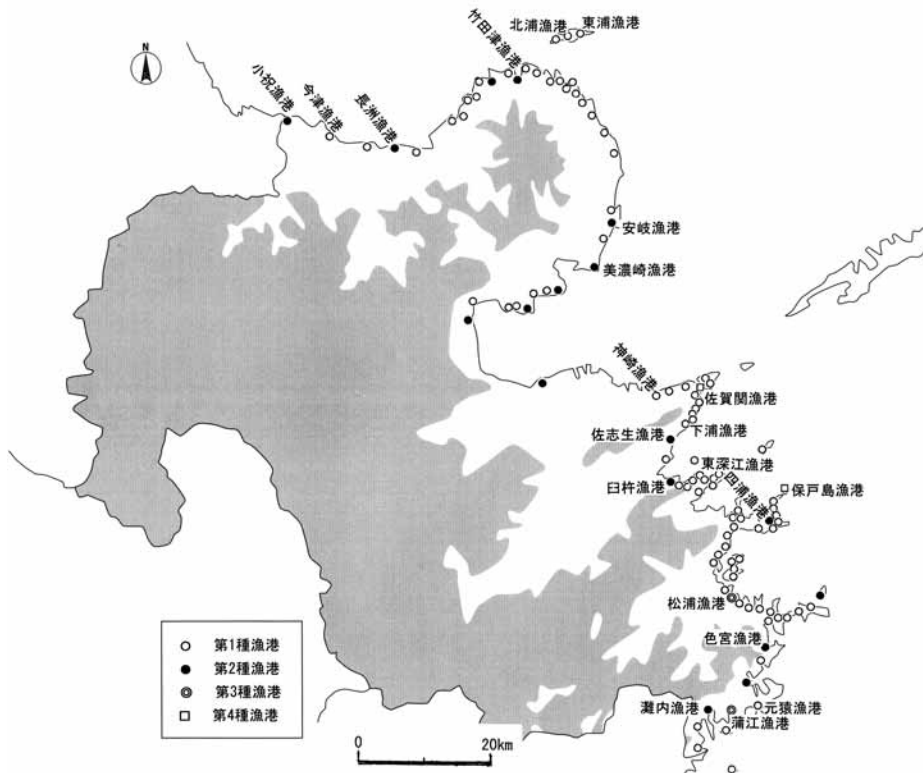
トンと都道府県別で日本1となった⁵⁾。

4. 水産業の地域的展開 生産拠点としての漁港の分布を中心に

最後に、漁業・養殖業の地域的生産拠点である漁港⁶⁾の分布についてみてみよう。第6図は、その分布を、また第1表は、海区ごとの主要な漁港の港勢を示している。これらより、海区ごとの特徴をみていく。

広大な干潟とその延長に遠浅な海域の続く豊前海区は、沿岸行政域としては、中津市、宇佐市、豊後高田市が含まれる。この沿岸に11の漁港が分布する。その中で、比較的規模が大きいのが、小祝漁港と長洲漁港である。中津市の小祝漁港は、ノリ養殖、アサリの採貝、カレイ底曳き網といった干潟域での漁業中心である。一方、宇佐市の長洲漁港も干潟およびその延長海域によるカレイ底曳き網とエビ、カニの刺し網が盛んな漁港である。

豊後水道から瀬戸内海への魚類の回遊路に当たる豊後灘海区は、沿岸行政域としては、国東市、および姫島村が含まれる。この沿岸に18の漁港が分布する。この中で比較的規模が大きいのが、姫島村の東浦・北浦漁港と国東市の安岐・竹田津漁港である。瀬戸内海国立公園に含まれる観光地である姫島村の東浦・北浦漁港は、タチウオやカレイの釣漁業やタコ壺漁、クルマ



第6図 大分県における漁港の分布

大分県農林水産部漁港漁村整備課 (2008)：『大分の漁港』による。

第1表 大分県における主要漁港の港勢

漁港名	漁港種類	所在地	豊 後 水 道			北 部 海 区		主要漁種	主要魚種
			正組合員数	準組合員数	経営体数	水揚量 ^(t) *1	水揚高 ^(百万円) *2		
小祝漁港	第2種漁港	中津市	255	36	160	1,213	703	底曳き網, 採貝, 養殖	ノリ, アサリ, カレイ
今津漁港	第1種漁港	中津市	65	11	55	275	178	底曳き, 採貝, 刺し網	アサリ, カレイ, ノリ
長洲漁港	第2種漁港	宇佐市	344	69	114	1,175	1,005	底曳き網, 刺し網, 採貝	カレイ, エビ, カニ
東浦・北浦漁港	第1種漁港	姫島村	62	11	73	581	498	釣り, 刺し網, 採藻	タチウオ, タコ, カレイ
安岐漁港	第2種漁港	国東市	37	17	54	553	323	底曳き網, 刺し網, 釣り	タチウオ, イカ, アジ
竹田津漁港	第2種漁港	国東市	12	20	24	91	25	採藻, 定置網, 底曳き網	ヒジキ, タコ, ボラ
美濃崎漁港	第2種漁港	杵築市	60	9	58	744	455	底曳き網	エビ, タチウオ, イカ
佐賀関漁港	第4種漁港	大分市	270	143	230	1,025	1,067	釣り	ブリ, アジ, タチウオ
下浦漁港	第1種漁港	大分市	28	40	48	51	36	採藻, 釣り, 刺し網	ヒジキ, タチウオ, サザエ
神崎漁港	第1種漁港	大分市	18	32	18	90	81	刺し網, 釣り	タコ, アジ, サバ
白杵漁港	第2種漁港	白杵市	237	235	39	67	51	釣り	タチウオ, タイ, アジ
佐志生漁港	第2種漁港	白杵市	36	43	78	963	619	養殖, 釣り, 採藻	ブリ, タチウオ, タイ
東深江漁港	第1種漁港	白杵市	33	6	38	293	149	まき網, 釣り	アジ, タチウオ, サバ
保戸島漁港	第4種漁港	津久見市	280	270	236	98	106	釣り	ブリ, イカ, フグ
四浦漁港	第2種漁港	津久見市	44	60	78	479	260	まき網, 採藻, 刺し網	サバ, アジ, ヒジキ
松浦漁港	第3種漁港	佐伯市	182	216	124	15,430	3,301	まき網, 定置網	サバ, イワシ, アジ
浦江漁港	第3種漁港	佐伯市	204	209	124	1,473	749	定置網, 養殖, まき網	ブリ, アジ, イカ
色宮漁港	第2種漁港	佐伯市	111	98	62	2,790	1,184	養殖, まき網, 船曳き網	ブリ, イワシ, アジ
灘内漁港	第2種漁港	佐伯市	83	79	84	1,948	1,351	養殖	ブリ, タイ, アジ
元猿漁港	第1種漁港	佐伯市	94	24	56	91	96	定置網, 釣り	ブリ, アジ, イカ
大入島漁港	第1種漁港	佐伯市	70	7	52	273	83	船曳き網	イワシ, シラス
間越漁港	第1種漁港	佐伯市	20	6	10	150	61	定置網	アジ, ブリ, イカ
小浦漁港	第1種漁港	佐伯市	20	21	14	67	66	養殖, 釣り	ブリ
浪太漁港	第1種漁港	佐伯市	8	1	9	105	104	養殖, 釣り	ブリ, タイ, フグ

*1・2:ともに属地統計につき、属人による他港水揚げについては不明。統計は、全て2005年現在。

大分県農林水産部漁港漁村整備課（2008）：『大分の漁港』による。

エビ養殖業の拠点となっている。安岐漁港は、タチウオやイカ釣漁業、竹田津漁港は、ヒジキの採藻やタコ壺漁、ボラなどの定置網漁業などがある。

外洋水と内海水が混合する栄養豊かで生産性の高い別府湾海区は、沿岸行政域としては、杵築市、日出町、別府市、大分市が含まれる。この沿岸に11の漁港が分布する。この中で比較的規模が大きいのが杵築市の美濃崎漁港である。ここは、底曳き網が中心の漁港で、エビ、タチウオ、イカなどが漁獲される。

典型的なりアス式海岸の続く豊後水道北部海域は、沿岸行政域としては、大分市（佐賀関町）、白杵市、津久見市が含まれる。この沿岸に33の漁港が分布する。この中で比較的規模が大きい漁港が佐賀関・白杵・佐志生・保戸島・四浦漁港である。一本釣で漁獲される関サバ、関アジブランドで著名な佐賀関漁港（大分市）は、この他にブリ、タチウオの水揚げも多い。「黒潮の狩人」カジキ突棒漁業の根拠地としての歴史を持つ⁷⁾白杵漁港（白杵市）は、釣漁業によるタチウオやタイの水揚げが多い。同じ白杵市の佐志生漁港は、ブリ養殖とタチウオ釣が盛んな漁港である。津久見の小離島にある保戸島漁港は、大正時代からマグロ延縄漁業の一大拠点としての輝かしい歴史を持っている。現在は、漁業者の高齢化、後継者難によって縮小傾向にあるが、でも県下一のマグロ漁業拠点であることに変わりはない。ただし、『大分の漁港』に記された統

計が属地統計のため、他所で水揚げされるマグロ類は出てこず、地元で水揚げされるブリ、イカ、フグが多くなっている。同じ津久見市の四浦漁港は、まき網によるアジ、サバの水揚げの他、ヒジキ採藻業が盛んである。

豊後水道南部海区は、沿岸行政域としては、佐伯市に属している。この沿岸に37もの漁港が分布する。この中で特徴的な漁港が、松浦・蒲江・色宮・灘内・元猿漁港であり、特に大規模な第3種漁港に松浦・蒲江漁港が指定されている。松浦漁港は、まき網によるサバ、イワシ、アジの水揚げが多い。蒲江漁港は、ブリ、タイ養殖とまき網によるアジ、イワシの水揚げが多い。色宮漁港は、ブリ養殖、まき網漁業などによるイワシ、アジ、サバの水揚げが多く、イワシやアジの丸干しを始めとして塩干魚生産九州1を誇る水産拠点である。灘内漁港は、ブリ、タイなどの養殖漁港が盛んである。最後の元猿漁港は、第1種漁港で規模は小さいものの、近年は「あまべ渡世大学」などブルー・ツーリズム⁸⁾を強力に推進する漁業地区として知られている。

5. 結 び

以上見てきたように、大分県の水産業は、性格の異なる5つの海域ごとに、明瞭な特徴を持って展開してきたことがわかる。それらを概説すると、①豊前海区は、広大な干潟とそれに続く浅海域でのノリ養殖や採貝業、底曳き網漁業などが展開していた。②豊後灘海区は、豊後水道からの魚類の回遊路として様々な魚介が集まる海域で、タチウオ他の釣や採藻、クルマエビの養殖など多様な水産業が展開していた。③遠浅で古来「城下ガレイ」でもよく知られる別府湾海区は、底曳き網漁業が盛んであった。④豊後水道北部海区は、リアス式海岸が続く、好漁港・漁場が展開する。北部佐賀関の「関サバ」、「関アジ」釣の他、マグロなどを狙う遠洋漁業が盛んであった。⑤豊後水道南部海区もリアス式海岸が続く。ここでは、まき網によるイワシ、アジ、サバ漁とそれらの加工、ブリ類養殖が基幹産業を成してきた。

大分県の漁業・養殖業は、総量的にはそれほど大きくはないが、タチウオ、クルマエビ漁業やブリ類、ドジョウの養殖などのように全国有数の生産をあげているものもある。

大分県には、規模の大きな第3種漁港が2、第4種漁港が2、第2種漁港が17、第1種漁港が89の合計110ものたくさんの漁港が分布している。そのそれぞれが、地域漁業の拠点として機能している。漁業就業者の高齢化や数的減少、そこに起因する生産の減少など多くの問題を抱える大分県水産業であるが、基幹産業としてどう生き残っていくのかが大きな課題となっている。

注

- 1) 統計は、農林水産業(2011)による。
- 2) 赤腐れ病とは、菌がノリ葉体に寄生して赤さび色の斑点が生じ、進行すると細胞が壊死してノリ葉体は脱落する。高水温時に発生しやすい(川島 他, 1988)。
- 3) バリカン症とは、バリカンで刈り取られたように、葉体がちぎれて流出してしまう病気。水温の昼夜での日較差が大きい時に発生しやすいとされる。近年蔓延している病気は従来のものに似るが、原因不明の状態のため、バリカン症様とした。

- 4) ノリ養殖に関しては、大分県農林水産研究指導センター浅海・内水面グループの斉藤喜昭氏に対する聴き取りによる。
- 5) 大分合同新聞2012年5月26日付記事「ドジョウ養殖拡大 県内生産量初の10トン」, 同webページ:http://www.oita-press.co.jp/localNews/2012_13379894112.html。
- 6) 漁港漁場整備法によって規定される漁港には以下のような種類がある。第1種漁港：その利用範囲が地元の漁業を主とするもの。第2種漁港：その利用範囲が第1種漁港よりも広く、第3種漁港に属さないもの。第3種漁港：その利用範囲が全国的なもの。第4種漁港：離島その他辺地にあって漁場の開発又は漁船の避難上特に必要なもの。漁港法第1章総則第5条漁港の種類（昭和25年5月2日法律第137号，最終改正平成23年8月30日法律第105号）。
- 7) 大分県白杵事務所編（1989）。
- 8) かまえブルーーツーリズム研究会（2015）。

文 献 他

- 大分県白杵事務所編（1989）：『黒潮の狩人』，大分県白杵事務所，pp.1-61。
- 大分県白津関地方振興局編（1993）：『保戸島 -その歴史と未来を探る-』，大分県白津関地方振興局，pp.1-112。
- 大分県農林水産部（2012）：『大分県の農林水産業』，大分県農林水産部，pp.1-42。
- 大分県農林水産部漁港漁村整備課編（2008）：『大分の漁港』，大分県農林水産部漁港漁村整備課，pp.1-133。
- かまえブルーーツーリズム研究会（2015）webページ：<http://kamae-bt.com/event/>。
- 柿本典昭（1987）：『漁村研究』，大明堂，pp.8-16。
- 川島利兵衛・田中昌一・塚原博・野村稔・隆島史夫・豊水正道・浅田陽治編（1988）：「ノリの赤腐れ病」（『改訂版 新水産ハンドブック』），講談社，p.436。
- 農林水産業（2011）：「漁業・養殖業生産統計」，同省webページhttp://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kaimen_gyosei/。
- 米田寛他（1981）：『大分の漁業』，(株)アドバンス大分，pp.1-189。